

優良農家の紹介

米ぬか、籾殻など副産物活用と環境に優しい土地利用型農業の追求

朝来市和田山町の高本彰一氏（農業経営士）は水稲と黒大豆の栽培、また作業受託を中心とする土地利用型農業経営を行っている。（経営規模：水稲11.5ha、黒大豆3.5ha、作業受託延べ30ha）

本氏は1969年、26歳のときに就農し、2003年3月に妻の幸枝氏（女性農業士）と長男の知宣氏（青年農業士）とともに有限会社「高本農場」を設立、規模拡大によるコスト低減に加え、米ぬかや籾殻など副産物を活用し、農薬や化学肥料の使用を極力控えた農業に取り組んでいる。

1 米ぬか、籾殻などを活用した水稲栽培の工夫

食味を重視した水稲栽培の取り組みとして、精米の過程で出る米ぬかをペレット状に加工し、11月～12月に10a当たり約200kg散布する。さらに翌春に有機肥料（N含量4%）を10a当たり100kg施用し、5月に水稲（主にコシヒカリ）を植え付ける。植え付け後は無肥料で栽培している。

また、乾燥調製の過程で出る籾殻を粉砕し、育苗用の床土として利用している。（粉砕籾殻9：まさ土1の割合で混合、重量は従来の育苗培土の半分程度）

これにより育苗作業時の労働強度の改善や経費の

節減（3割程度）ができた。さらに、通気性に富むことから根の張りが良いなどの特徴が見られ、苗を購入している農家に好評である。（育苗枚数17,000箱、うち育苗受託数15,000箱）

2 環境に優しい農業への取り組み

水稲での農薬の使用は箱施用剤と除草剤（初期1回処理剤）のみである。最近普及し始めた種籾の温湯消毒技術についても過去2年間試行を重ね、今年度から全面的に導入している。

黒大豆では、フェロモントラップ等を活用し、薬剤防除は実施せず、安全・安心な産品づくりを重視した栽培を行っている。

3 米の有利販売や労働環境の改善などによる経営向上への取り組み

経営の柱である水稲部門において米の検査資格を取得しており、「民間検査場」として自家検査後、全て直売で有利販売している。

また、妻、長男と労働時間や休日、給料、役割分担等についての家族労働協定を締結し、企業的経営を追求している。

岸根秀明（和田山農業改良普及センター）



籾殻混合培土による育苗作業の様子



根の張りが良いと好評な水稲苗

ひょうごの農林水産技術 No.140

平成17年7月1日（隔月刊）

兵庫県立農林水産技術総合センター（0790）47-2400

1部250円（申込先・県立農林水産技術総合センター）